

Title	西村孝夫著 インド木綿工業史
Sub Title	
Author	三宅, 昱子
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1966
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.59, No.9 (1966. 9) ,p.1020(110)- 1021(111)
JaLC DOI	10.14991/001.19660901-0110
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19660901-0110

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

本書で論じられ、主張されていることは、日本という立場からいって、低開発国問題にとり組み・アブローチする際におけるいわゆる確立された常識ないし通念となるべきものであり、合理的な思考を行ないうる人々によつては、当然支持されるべきものである。

勿論、積極的に低開発国とくにアジア問題にとり組む場合、日本側への一時的なマイナス、構造転換にともなうコストが生ずることは事実であるが、長期的に考えればより合理的な資源配分が行なわれ、経済成長を一層促進することになることは明らかであり、我々はより長期的に考慮し、何等かの積極的措置によつて短期的困難を克服していくことが必要であるように思われる。

ただ本書は、すでに発表された論文をまとめたものであるので、現在の時点において考えれば、大幅に書きあらためる方が、より有益ではないかと思われるものがいくつかに目についたし、また本書に断片的に言及されている理論的研究をさらに体系的かつついでに行なうことが必須のことと思われる。

低開発国問題とくにアジア問題に関心ある人々に広く一読をすすめたいし、むしろ手帳によめるにもかかわらず、読了したあとに何

かが必ず残り、いろいろと考えさせられるといった意味において貴重である。我々は本書にかかれた内容を通念・常識化して行くとともに、これを共通の基盤として、一層の研究・展開をこころみることが大きな課題であろう。(ダイヤモンド社・一九六六年六月刊・B6・二三九頁・三六〇円)

— 深海博明 —

西村孝夫著

『インド木綿工業史』

インドの研究は、従来その固有の文化、慣習等の現象面に主として関心が集められて来た。これは十六世紀以来東洋に進出したヨーロッパ諸国のインドとの接触が外面的なものであったからである。インド社会の内部との交渉が必要になったのは十八世紀後半のことである。しかしそこでヨーロッパ人の目に映ったインドは、古代そのままのような停滞した社会であった。従つてその後のインドに関する研究の努力も、主に古来の慣習・制度に向けられることになり、今日までその経済史的研究の大部分は、ヨーロッパの進歩に対す

るアジア的停滞として経済の後進性を強調するものとなった。本書は、この「ヨーロッパの普遍主義史観」に基いてインドの経済をとりあげる態度を批判して書かれている。そして最も古くからインドの社会に根をおろし、十九世紀以降のインドの荒廃と、現代の経済自立問題の焦点となっている木綿工業をとりあげて、これをインド全体の社会機構・経済構造の中で追求して行く、実証的立場が主張されている。インドの停滞の条件を明らかにするには、ヨーロッパ資本、特にイギリス資本が、インドにおける綿業と農業が古い形で結合していた社会構造を破壊して行った過程と、その限界の分析が必要であると考えられているからである。

本論で、インド木綿工業の原型は、それが最盛期にあつた十六―十七世紀のものにおかれる。ヨーロッパ諸国と直接の接触がなかったそれ以前の時期については、前史として扱われている(第一章)。原型である綿織物生産の構造は、生産技術と共に直接生産者であるインド農民の共同体とそれを規制するカースト制の関連において検討され、商人や王侯の支配を経る綿製品の流通機構が分析されている。この原型はヨーロッパ資本の作用を捨

象して求められたのである(第二章)。次いでこの原型がヨーロッパ資本との接触により、どのように変化し破壊されて行ったかが追求される。ポルトガル、オランダとの接触(第三章)。それにつづくフランス・イギリスとの接触(第四章)。イギリス資本の本格的進出である東インド会社によるインド手織綿布生産者の支配、イギリス産業革命との関連、その後のイギリスの対インド政策の変更と、インド綿工業の没落過程(第五章)、イギリスの支配下においてイギリス綿工業の原料供給国、製品の販売市場となったインドの経た社会経済構造上の変化(第六章)という順序である。第二次世界大戦とその結末がインドに及ぼした作用は現代の問題として、改めて技術・生産構造・市場・政府の経済政策の諸点にまとめられた(終章)。

補論として、二つのインド社会に関する業績の検討が行われる。一つはジェームズ・ミルと東インド会社の関係、及び彼の『英領インド史』に関するものであり、他はウェーバーのインド社会論に関するものである。後者ではインドの社会構造研究におけるウェーバーのカーストや宗教の側からの分析をとりあげて、それが十七世紀以前のインド社会に対

しては優れたものであるが、それ以後の停滞性に関しては十分なものでない点の批判を行っている。

本書はインド経済史の実証的研究の方法として、発展性のある好著である。(未来社・一九六六年三月刊・A5・二二〇頁・一五〇〇円)

— 三宅昱子 —

越智武臣著

『近代英国の起源』

著者は、先年物故したロンドン大学の碩学、R・H・トニー教授に師事され、わが国のいわゆる「ジェントリイ論争」に活発に参加されて来た方である。本書は、従来の通説、「近代の典型」としての英国を、国民史という枠組の中で再検討し、近代英国のトレイガーが如何なる社会層に属したかを究明せんとしたものである。

第一章「政治変革の進展」、第一節「国民国家の覚醒」において、著者は、近代英国の国民国家としての成立を、一五三〇年代の一連の政治変革の中に求める。この時代の国際

政治、殊にイタリヤ戦争が、英国国民の対自的な国家性の認識を呼び醒ましたからであり、この戦争が、対ローマ政治の破綻を伴っていたが故に、教皇権に対する国家教会の定立、即ち宗教改革を余儀なくさせたからであった。近代国家の前提条件としての行政制度の転換点も又、一五三〇年代であった。

第二節「絶対王政の風土」は、これ迄の「絶対主義論争」を突り多きものとするために、新たな視角、即ち絶対君主エリザベスとそれをとりまく宮廷の派閥抗争の中に、絶対王政政治の構造を見ようとするものである。更に、こうした中央政治と地方政治を結ぶものとしての議会のあり方が検討され、根強く残る地方主義、州の重要性が強調される。州の政治の実権を握っていた階層こそ、地方名望家、ジェントリーであった。

第三節「革命政治の底辺」では、いわゆる「清教徒革命」について、革命史には不可避である党派の解釈と時代の推移によつて変化する革命像とが回顧され、最近の英国史学界の顕著な動向である地方史研究に即応しつつ、革命における地方と家族の問題が、ノッティンガムシャーの一寒村での現地調査をもととして解明されている。